

3925 地球のかおり：「銀色の航跡」(産経新聞) 心模様

北へ。地の果てまで。冒険者には、憧れであり、夢とロマン。

ノルウェーの首都オスロから、距離にして、2,247 キロ。

フィンマルク地方、ノールカップ岬は、北緯 71°10'21" ヨーロッパ最北端の岬。

世界最北端の街、ハンマフェストがある。サーメ文化の地域。

ノルウェーは、南北に細長く、国土の半分は、山岳地帯。

30%以上が、森林や河川、湖と沼。

チャレンジの開始。今回も車を使ってのひとり旅。持てる荷物を車に彫り込んだ。

街の市場に飛び込み、食料を仕入れ、万全の準備が整った。

どんな出会いがあるのだろうか。何が見られるのだろうか。ワクワクする。

男の夢とロマンを実現するひとり旅。いろいろあって今一人。それが幸いした。

普通なら出来ないだろう。

旅の始まりは、関西国際空港から。デンマーク・コペンハーゲン経由、フィンランドへ。

そして、フィンランドから、ノルウェー・ノールカップ岬をめざした。

地の果て、最北端のノールカップ岬。

その地に、無事、身を置き、身体一杯に美味しい空気が吸えれば嬉しい。

馬鹿みたいだが、大地にひれ伏して、口づけしたい。夢であり、憧れだった。

その夢が実現。日本を出発したのは、5月21日。

帰国は、7月14日、フランスのパリ祭の日。無事、帰国出来れば、祇園祭に間に合う。

期間は 55 日間。ゴーゴーひとり旅。

ノールカップ岬に到達したのは、6月の初めだった。

嵐のように吹き荒れた時もあった。強風で、車が動くという、恐怖の初体験もあった。

その時、どうしたら良いのか、その術がわからない。知恵を絞った。

風を避ける場所をさがすのが精一杯。やり過ごすまでは、ただ、じっと待つだけでいいのか？

これ以上、何も起こらないでほしい。

その後、貝のように、^{かたず}固唾をのんで、推移を見守る、岩陰で我慢の時間を持った。

異郷での貴重な体験。想定外とは言わない。もしかしたら・・・ 脳裏の片隅にあった。

やがて、ひと時、やわらぎ、強い心で考動開始。街を探した。**視界が厳しい。**
やっと、宿に遭遇。部屋を確保できた喜び。建物の中の暖かさ。
これは感激そのもの。普段感じない出来事。今となっては、いい体験。
ノールカップ岬への、ひとり道中は、とにかく厳しかった。それだけに、思いはひとしお。
心の財産が、また一つ増えたことになる。
ノールカップ岬、出来れば、しばらく、この地に身を置きたい。未知の体験を味わいたい。
立ち去りがたい、なんとも言えない気持ち。しかし、長く留まるのは危険。
何しろ、その時は、視界不良、厳しい状況だった。
私一人ではなかった。おそらく旅人だろう。どんなルートをたどって来たかは、わからないが、
人と出会った。ノールカップ岬のモニュメントに触れていた。
驚きもあったが、人間様と認識できた。満足そうな顔。冒険者の顔でもあった。
会話もしたかったが、目顔で挨拶。名残惜しかったが、そんな状況ではない。別れを告げた。

そして、**南下を開始。**まず、北極圏の玄関・トロムソまで。
ノールカップ岬から、トロムソまでは、約500キロ。道中、未知との遭遇。道草をかきねた。
トロムソから、オスロまでは、1,665キロ。
今回の南下の選択肢は、東の海岸線をたどる、ベルゲンまでのコース。
トロムソからベルゲンまで、1,772キロ。
ロングウエイだが、楽しみ。気持ちは、気楽になっている。時間の余裕も充分ある。
あとは、気ままないつもの自由行動の旅のスタイルに戻った。

トロムソから、海岸線に沿って走る道路。険しい断崖絶壁の道路。脇見は禁物。
駐車スペースを見つけるのが大変だった。
急カーブや険しい道も多かった。待ったなし。
言い訳なし。後悔なし。無事故、安全が絶対条件。スピードダウン。
急ぐ旅ではない。そんなはずではなかったは、通用しない。
誰が見ていようが、見ていまいが久楽流。ルールやマナー厳守も絶対条件。
チャンスを見つけて、こまめに駐停車を重ねる。
車外に出て、身体ストレッチ。絶景を楽しむことも忘れない。
ともかく、空気が美味しい。気分も最高。
北極圏を越えた、北方の広大な荒野も心に響いたが、フィヨルドのコース、様相が一変する。
曲がりくねった道や小山を、やり過ごすたびに、眼前の光景が変わる。

深いフィヨルド。そそり立つ山々に沿うように道がつづく。

トンネルを抜けると、眼前の光景が一変する。

ドラマチックな光景にも出くわす。感動。素晴らしい、の一言。魅力の虜^{とりこ}。

次々と変わる景観。フィヨルドの景観は、壮大で、やすらぐ。

道中、フェリーにも乗船。絶壁から流れ落ちる豪快な滝を楽しみ、山々を見上げる快感。

心洗われるという表現がぴったり。

そして、下船後、いささかお腹も空いた。飲み物とお菓子を持って、丘の上に陣取った。

そして、眼前の光景との出会い。最初は、なんでもない光景だが、船が、私の心をとらえた。

厳しい戦いをしてきた後だけに、この小さく見える船の存在と航跡、光の様^{さま}に、

なぜか、ジーンと、心が熱くなった。

理屈ではない。鳥肌が立つような気持ち。感激が頂点に達した。

なんとも立ち去りがたい思いを抱いた。

いつまでも眺めていたい。どこから来て、どこに行くのだろう。想像と好奇心全開。

この小さく見える船。荒れた海も航海しなければならない。

実際は、実に大きな船である。大きなトラックや車を飲み込んでいるのか。

スカンディナ비아半島、ノルウェー。東は、スウェーデン、フィンランド、ロシアと国境を接する。

西は、ノルウェー海と大西洋。南は、北海。北は、バレンツ海。

北極圏の玄関口・トロムソ。4月以前は、氷点下。5月の平均気温は5度。

6月になると、10度くらいにはなる。

現実には、風もあり、体感する寒さは、その程度には思えない。時間帯もあるのだが・・・

日によっては、しばれて、5分も外に出られない場所もあった。

途中、トロンハイムという都市がある。ベルゲンから北へ、約600キロの位置にある。

6月下旬の日の出は、午前3時。日の入りは、午後11時。

北に行くほど、日照時間が長くなる。北部の一地域では、全く、太陽が沈まない時期がある。

真夜中の太陽、ミッドナイトサン。ノールカップ岬では、5/13~7/29。

トロムソでは、5/20~7/20という話。よく話に出るオーロラ。北極圏以北で見られる自然現象。

北極圏は、北緯66度33分。11月から3月、晴天、低めの気温に見られる。

真夜中の太陽が見られる場所と共通。

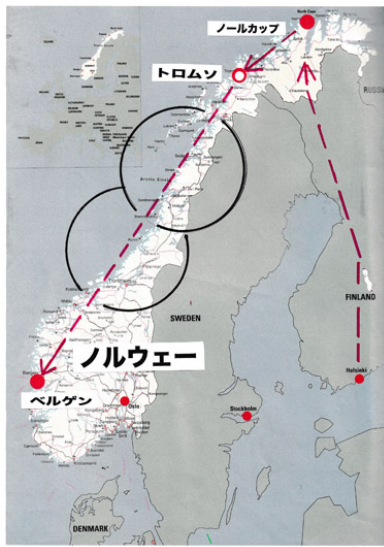
ノルウェーの東側は、ノルウェー海。メキシコ湾流が流れ込んでいる。

冬でも極寒にならない。夏には、30度まで気温が上昇するという。これは場所によるのだろう。

私は、そんなふうを感じなかった。

山を隔てたフィンランドは、極寒の地。まるで、様子が違って来る。

地形のせい？ メキシコ湾暖流も影響しない。極寒は、一部だった。しかし、寒かった。



話を元に戻して、ジーンときた光景。

カーフェリーだろうか、クルーズ船だろうか、それとも豪華客船？ いや貨物船？

ノルウェー、ベルゲンからクルーズ船が出ている。

イギリス、デンマーク、アイスランドへのカーフェリーもある。

アイスランドのカーフェリーかもしれない。

しかし、ベルゲンからは、はるかに遠い。いろいろ想像が広がる。久楽には至福の時間。

船に対しての興味もあるが、航跡が実に興味深い。

航跡から見えてくるものがある。感じるものがある。

スピードを落とした時の航跡。快調にスピードを上げて航行する航跡。

風もある。波も影響するだろう。

八の字に広がる航跡。推理するのがなんとも楽しいひと時。狭い海峡を通り抜ける船。

洋々と広大な凧の大海を、悠然と航行する船。

山上から見る航跡。海の深さまで想像してしまう。

時に進路を変える。どうしたのだろうか。岩礁でもあるのだろうか。

上から見ていると、岩礁があるとは思えない。限りなくブルーのフィヨルド。

左右の山々から、大小の滝が流れ落ちる光景を見てきている。

目線を上げて、左右を見渡しても、目に飛び込んでくる光景は、広大で壮大。

日本の内陸に居を構えていた私には、実に興味深い。そして、心楽しい。

船が、豆粒になるまで眺めていた。

ゆっくり、ゆっくり、時間が流れている。感性で旅する、ひとり旅。

これ以上のぜいたくな旅はない。冒険とリフレッシュの旅。勿論、取材を兼ねて。

十二分にエネルギーをもらった。**自然は私の活力源。**

人様にもシェアできたらと願う。まだ、今回の旅の半分も来ていない。

この雄大な光景で、力が湧いてきたのは事実。

この先も充実した旅になりそうな予感。

ふと、我に帰ると、航跡は砕け散って、跡形もない。

静かな、何も無い大海原が、以前のように、眼前に広がっていた。

目を遠くにやると、航跡が影響したのか、

その後の航跡の余波か、光と反応して、キラキラ。

2倍に、その後も楽しませてもらった。瞬きの、眼前の船と航跡。

偶然のなせるわざ。距離感も恵まれていた。航跡のおかげで、いろいろ作品も残った。

ワンシーンだが、前後、左右に、**物語がある。**

ひとり旅は、スローライフ。

若い時に頑張ったから、今日があると思いたい。夢でスタート、

ロマンで進展、そして、現実との遭遇。人生選択に後悔はない。そして、今また、夢挑戦。

谷村新司の歌の文句に、年老いて初めて気づく空の青さよ、とある。

眼前の光景に、ここまで感じたのはなぜだろう。

心は、若すぎるほど若い。天国と地獄、その落差のせいなのか。一生懸命、生きてきたから？

自然が、地球ひとり行脚が、私を甦らせてくれた。挫折からの脱却。気持ちが切り替わった。

自然を深く体験することで、**生きることの意味**が、少しだけわかって来た。

ひとり旅という、旅のスタイルも良かった。地の果てや僻地を、ただ一人で、旅する。

誰にも頼れない状況が何度も襲ってくる。懲りずに、やり過ぎて今日がある。

大海を航行する小さな船。小さな船だが、実に大切な役割を持つ。

船の役目以外に、私の作品に、元気もらった。

臥龍点睛。小さくとも**存在感のある生き方**。まだまだ、わからないことだらけ。

これからの試練を、どう克服していけるのか。そこまで思いが広がった。

ひとり旅が、いろいろ教えてくれた。気づかせてくれた。

ひとり旅。一度はするもの。今後も悩むことが多いだろう。あとは、ライフワークを淡々と実践。

夢は探すのではなく、夢は創るもの。蝸牛、登らば登れ 富士の山、と

言葉では格好をつけているが、どこまで、頑張れるか、夢と現実。眼前の課題である。

今日の京都は、半端ない暑さ。今日は、珍しく外出を控え、室内の掃除始め身辺整理。

午後3時半、体験したことのない雷音。気合が入った。

近畿地方では、今週、花火大会があるらしい。滋賀県、琵琶湖でも・・・